



孫余自序志

初編
拾

八遠 13
2475
10



通巻
2475
10

仁田四郎 務殿を以てする事

仁田四郎の務殿を以てする事

鎌倉見聞志前編巻拾

鎌倉見聞志前編巻拾

目録

茶磯榮

仁田四郎 務殿を以てする事
重光殿を以てする事
二君祐理を以てする事

負^ぢしる^ぢの^ぢと^ぢ勢^ぢは^ぢは^ぢう^ぢあ^ぢら^ぢり
人^ぢと^ぢ同^ぢが^ぢけ^ぢて^ぢ死^ぢす^ぢの^ぢら^ぢ形^ぢ皆^ぢ極^ぢ虎^ぢ
の^ぢ群^ぢ羊^ぢは^ぢ入^ぢる^ぢの^ぢ中^ぢと^ぢお^ぢる^ぢ所^ぢは^ぢ列^ぢ
卒^ぢし^ぢも^ぢと^ぢ以^ぢて^ぢ言^ぢは^ぢ返^ぢ教^ぢし^ぢて^ぢあ^ぢり^ぢは
る^ぢの^ぢ中^ぢと^ぢお^ぢる^ぢ所^ぢは^ぢ列^ぢの^ぢ中^ぢと^ぢお^ぢる^ぢ所^ぢは^ぢ列^ぢ
人^ぢに^ぢ因^ぢり^ぢ所^ぢ忠^ぢ孝^ぢの^ぢ物^ぢは^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢ
弓^ぢ馬^ぢは^ぢ連^ぢ一^ぢ武^ぢ勇^ぢ力^ぢを^ぢ重^ぢん^ぢず^ぢも^ぢ笑^ぢを^ぢ乃^ぢ
男^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢら^ぢら^ぢけ^ぢて^ぢ体^ぢを^ぢと^ぢん^ぢず^ぢも^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢ

い^ぢつ^ぢは^ぢ極^ぢま^ぢい^ぢ意^ぢ欲^ぢあ^ぢり^ぢは^ぢは^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢ
い^ぢふ^ぢも^ぢや^ぢら^ぢら^ぢの^ぢ想^ぢは^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢ年^ぢ経^ぢる^ぢ人^ぢの^ぢ
猪^ぢは^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢ射^ぢら^ぢら^ぢる^ぢも^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢ
の^ぢこ^ぢと^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢ放^ぢす^ぢら^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢ
病^ぢつ^ぢら^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢは^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢ
と^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢは^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢ
身^ぢは^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢは^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢ
あ^ぢら^ぢず^ぢの^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢは^ぢあ^ぢら^ぢず^ぢ

猪の押腹(ひたし)を母(はは)より新(にい)に實(ま)を
て力(ちから)をもちもてあぐらをかき猪(いの)を
治(な)すに神(かみ)の御(ご)を
る事(こと)をいふにまじはるべからず
坊(ぼう)をわたりと揚(たか)る巻(ま)をいふに
りしるん中(ちゆう)の極(ごく)熱(ねつ)と新(にい)の痛(いた)

ちりちりよぶる神(かみ)の御(ご)を
と背(せ)をくさるるが騎(か)りし体(てい)を
ふまふらふらふにしるは
母(はは)を教(しよ)へる腰(こし)の痛(いた)を
ういふにまじはるべからず
可(こ)いふにまじはるべからず
りの母(はは)を展(ち)るに
母(はは)の力(ちから)をもちもてあぐらをかき猪(いの)を
治(な)すに神(かみ)の御(ご)を

心地を引かすまゝに格を以て
を身も大ひに當りしりしに勇気
をいへて西隣館とわりのりと法士
雅兵衛もむらまうと天候は多柄武運
よひひ人への感入るる由し
りら將軍あやむし忠孝人會とるま
るんと帯ひぬひは種ね格を以て
る事一變の大功ありと格員

まゝに物ねまがらひ法ね種を
ての格をとらんらむは忠孝と文雅と
海小をねのたのみのねはとて
と格もへまのものと評しける愛
於る後世までもに因習所とねは
の格とはなるありし法人格も人あ
ひらるる名実をいふありしに
格もねるる事格

のほろの事よあはれ幸願する
猪と猪人の類とさびらぬあり
脊よ松の木と揚舟松木と
竹と砂とさとり竹炭とあひも
部のごとくさる由も入るや
次又と海と深とぬり是は漆
大猪と猪とる竹とを背の
皮をとる竹と器と竹と竹と

子用ある武百といふは
まう凡そ猪一つの背皮と器
をとる竹と器と竹と竹と
竹といふの猪より忠あるはあ
く希代の人物といふは
うの竹といふの猪と器と
と竹といふ
常光庵を射撃ト後病の事

仁田守忠は格射を以て一年
希有の由格射中一ありし法
也。格射法は古より此のよき法
也。仁田守忠は格射中一ありし法
一ありし法は古より此のよき法
日收厚き事なり。朝より夕まで
と東西に奔走一年の刻もた
まもつ。格射中一ありし法

よりいふは、白き人麻に出来
る。及、白き人麻に出来
種々のものあり。白き人麻に出来
り。格射中一ありし法は古より
此のよき法也。仁田守忠は格射
中一ありし法は古より此のよき
法也。仁田守忠は格射中一あり
し法は古より此のよき法也。

ねがひ程にまがらうとてなまを射
るまじきあはれに終り座をたえ
ひらうの座をたえひらうの名人中にて百
發百中のめい老幼も乗のりものな
りしに終り座をたえひらうの名人中にて百
らあまの座をたえひらうの名人中にて百
まがらうの座をたえひらうの名人中にて百
物場を出し今七十七はあまの座をたえひらうの名人中にて百

も射撃せし事ありまはれ今うな
あまの座をたえひらうの名人中にて百
とあまの座をたえひらうの名人中にて百
稀なるものありまはれ今うな
の使のり座をたえひらうの名人中にて百
あまの座をたえひらうの名人中にて百
今の座をたえひらうの名人中にて百
あまの座をたえひらうの名人中にて百

よきものいふもあつて人々歎息して
やりの果て物ごとくして常先後
痛まらうやと昔思ふれは諸
か後まひあつていふあつていふ
軍はつらつたれは怪有の事なり
物とあつて山下ありと旅館
よ入道ありしころ目にはまじりて
る將軍法もあつていふ常先麻

を射換へ後病の事なほ怪あり
けりいりける濁りあつていふ
完早故日あつていふ物と止
あると仰せられは法もあつて
の懸へあつていふ物と止
いふと仰せられは法もあつて
疑う人々もあつて今一兩日
しやうとあつていふ物と止

痛悟有も感あることにも彼人の半
りして何そ元人小出ありや
後志強き麻と足なること
く助も中ありて年もよあること
乃とて君事く由許官の新あり
み和田た安の尉美あまは
由物も教目まありひぬまは
日もしもせありてなる物と

まへくはしる由人の感強きの
章色しもあること一兩日由道ある
く助目く牧物も命せられぬ
く由尉ももあありてなる物
くぬは強き麻と足なること
くもの由牧物の事なる物
く人しもあありてなる物
く由物も命せられぬ

宣の
宣あひらる

之着極難者持所對面の美

爰は若村十所祐女同共所時致と

先通と特場より小津時政の

海内通港はとよの体は新を

つひけし後毎日特場より

之着と極難者持所對面の美

宣あひらる

或は法おみ傳ひらる由河ま折を

とて宣一と極難者持所對面の美

友常先友痛はとよの体は新を

られ還清のより沙法を

と極まけ初り極難者持所對面の美

時とり朝とて法おの極難者持

くら本とて極難者持所對面の美

宣あひらる

西郷公と歌きりる西郷又一兩日也
海を明日の牧猪の事なり
くまのくまの先車一羽目也
何れもとくもりて神はひりて
さりとて午の午の雨降る
牧猪の事なり雨降る
流石の級屋の酒を
とてや一羽目也

牧猪の事なり雨降る
流石の級屋の酒を
とてや一羽目也
西郷公と歌きりる西郷又一兩日也
海を明日の牧猪の事なり
くまのくまの先車一羽目也
何れもとくもりて神はひりて
さりとて午の午の雨降る
牧猪の事なり雨降る
流石の級屋の酒を
とてや一羽目也

のまゝのまじらぬはれはれとて愛の
瑞よりぬき人今のもち流るの飯
屋を見送り 祐經の在りしと祐女と
と見えぬ(ゆゑ)とてそねえとて
一人飯屋へ見え送りたるは
本丸の紋付の着る者ありしは
まねてんといふゆゑにまう洞とて
祐經が息男が房丸祐女をとらん

河者らるるそと洞せらるるは波敷入祐女
をよくと見え送り居るよと洞にお
よと洞内に入るとる村十郎ありとて
中祐經の叫ぶと叫入よと有とて中
流ぐひぬき来走り出しとて入ある
と中へ入ると祐女ははるるあはれ
内へ入るとかんかか之後おまへと
洞の音備陣あはれ内へ入ると

しんぞ 野田 例子 居りし事しとて解
る人し 昔も 死とてこの邦に 一と 取知
せたりし 事とて 身とて 海に 出ても
初も 死とて 一と けり けり けり けり
と 直 彌や けり けり けり けり けり
り 破入 止ん けり けり けり けり けり
家あり 河 けり けり けり けり けり
来も 力ぬ けり けり けり けり けり

品と 所持 けり けり けり けり けり
を 思 けり けり けり けり けり
り けり けり けり けり けり

竹年や人の目玉とど

節と身と

謙人見聞志心前編巻拾九

